

よりよい保育に向けた言葉がけ

第2回 「子どもへの言葉がけ①」 ～楽しく登園してもらおう！～

日本保健医療大学 講師 木梨 美奈子



楽しく登園するための朝の受け入れ

保育所などの保育現場では、毎朝の登園時は、大変慌ただしいものです。子どもの心身の状態はさまざまであり、保護者も仕事に出かける前で気持ちが焦りがちです。

慌ただしい登園の時間帯にも、保育者には子どもたちが楽しく登園できるよう配慮ある言葉がけが必要です。また、一日の初めに、子どもの心身の状態を把握するための声かけも必要です。

以上2種類の保育者の「声かけ」について、説明します。まず1つめの「子どもたちが楽しく登園するための声かけ」についてです。保育者は登園してくる子どもに対して、明るい笑顔で挨拶をします。この時に、一人ひとりの子どもと目線を合わせ、子どもの名前を呼びながら「〇〇ちゃん、おはよう！（年長児には「おはようございます！」）」と保育者の方から挨拶をします。子どもが、小さい声でも挨拶できた場合は褒めてください。「おはようって言ってごらん。」など、挨拶を強要すると、登園嫌いの要因になりかねません。

2つめは、「子どもの心身の状態を把握するための声かけ」についてです。保育者は、子どもの心身の状態に応じて保育するために、子どもを観察しなければなりません。朝の登園時に、声の調子や顔色などにいつもと違う状態が認められた場合には、保護者が一緒に登園していますので、保護者に「今日は元気がないようですが、何かありましたか？」などと、明るく質問してください。就学前の子どもは、言葉の発達段階上、心身の不調を自分の言葉で伝えることは困難です。登園時には、必ず保護者に声かけをしてください。

登園を嫌がる子どもへの声かけ

登園を嫌がる子どもには、楽しく登園できるよう

に、また、保護者が安心して子どもを預けられるよう、保育者は声かけをしていく必要があります。

登園を嫌がる子どもには、その背景に、発達状況、性格、体調など、さまざまな要因があります。ここでは、よくありがちな2つの要因と保育者の対処についてまとめます。

①保護者と離れたくない

登園を嫌がる理由で、最も多いのが「保護者と離れたくない」です。

保育者は、まずは、子どもの気持ちに寄り添い、「ママと離れるの、寂しいよね」など、子どもの気持ちに共感する声かけをします。この声かけで、子どもの気持ちが落ち着いたところで、保育者は、「今日は何をして遊ぼうか？〇〇ちゃんも〇〇くんも一緒だよ」と、楽しいことを提示して保育室への入室を促す声かけをしてください。

②長期お休み後の登園不安

連休や風邪などで休みが続いた後に、登園を嫌がる場合があります。

保育者は、「今日は、粘土で遊ぼうね。〇〇ちゃんは、何を作りたい？」「今日の給食は何かな～？」など、子どもが園生活に期待感をもてるように、子どもの意欲を引き出せる声かけをしてください。

子どもは、園生活が楽しいと感じれば、登園を嫌がることはなくなります。毎日、園に行くことが楽しみになり、夕方、保護者が迎えに来て「家へ帰りたくない」と残念がる子どももいます。

保護者として良くない言葉がけは、「どうして嫌なの？」と子どもに尋ねることです。理由を追及することは、逆効果です。保育者は、子どもの気持ちを受け止めてから、園生活に期待感を持てるような声かけをしてください。

よりよい保育に向けた言葉がけ

第3回 「子どもへの言葉がけ②」 ～遊びの中で(1)～

日本保健医療大学 講師 木梨 美奈子



遊びの中での言葉がけのポイント

子どもは「遊び」を通して心身が発達します。体を動かして遊ぶと、身体機能が発達し健康な体になります。子ども同士で、ごっこ遊びをすれば、言葉が上達して社会性や想像力が養われます。何気ない遊びの中で、子どもはその後の人生を生きる基礎を培っています。

保育者は、保育現場で、子どもたちが楽しく思いつきり遊ぶよう適切な言葉がけをする必要があります。

遊びにおける言葉がけのポイントを以下3点挙げておきます。

① 危険なことは事前に言葉がけをする

子どもを遊ばせる前に、危険なことは事前に知らせておきましょう。「ここから向こうは危ないから行かないでね」「ハサミは危ないので、他の人に向けなくてください」などです。

危険な状態になってから保育者が言葉がけすると、間に合わなかったり、子どもは不安を感じたりします。

② 共感する言葉がけをする

子どもの気持ちに寄り添って、共感する言葉がけをしましょう。「楽しいね」「よくがんばったね」など、子どもの気持ちを代弁します。

子どもは、言葉で表現できない場合も少なくありません。保育者が子どもの気持ちに共感して言葉がけすると、自分の気持ちに気が付いたり、表現の方法が分かったりして、言葉で伝えられるようになるものです。

③ 音楽やゲームを入れて言葉がけをする

連休明けなどで、子どもたちがざわついている時に、保育者が大声で言葉がけするよりも、「この音楽が鳴ったらお片付けしようね」「お片付けは誰が一番かな？よーいどん」と、音楽を使ったりゲームを取り入れたりすると、子どもたちのやる気が引き出せます。言葉がけの効果が上がります。

遊びの中で気を付けるべき言葉がけ

保育者が心ない言葉を発すると、子どもは大きく傷つき、保育者に心を閉ざしてしまいます。そのような事態になれば、子どもは心から遊ぶことができず、遊びから得られる発達に支障が生じます。

子どもが楽しく遊べるために、保育者として気を付けるべき言葉がけについて、以下3点挙げておきます。

① 子ども同士を比較する

保育者の「〇〇ちゃん是可以するのに、△△ちゃんはできないよね」などと、他の子どもと比較する言葉がけは、子どもの心を傷つけてしまいます。

比較されると「他の子はできるのに自分はできないんだ」と自信をなくしてしまうのです。

その結果、子どもは自己肯定感を高めることができず、自分に自信をもって前向きに生きていくことができなくなってしまいます。

② 命令口調の言葉がけ

保育者の、子どもたちへの「〇〇やりなさい！」などの命令口調の言葉がけは、子どもたちが恐怖感をもち萎縮してしまいます。

保育者として、時には子どもたちを叱ることも必要です。なぜ叱っているのか、子どもに叱る理由を説明すれば、保育者の気持ちは子どもにきちんと伝わります。

③ 乱暴な言葉がけ

保育者は、何人もの子どもを相手に、ついイライラする場面もあることでしょう。しかし、「なんで〇〇するの!」「だめと言ったでしょう」など、乱暴な言葉は、子どもが恐怖感をもつだけでなく、保育者に心を閉ざしてしまうきっかけにもなります。

保育者は、「〇〇だから、〇〇してはいけないよ」と優しく言葉がけをすれば、子どもも楽しく遊び続けることができます。

よりよい保育に向けた言葉がけ

第4回 「子どもへの言葉がけ③」 ～遊びの中で(2)～

日本保健医療大学 講師 木梨 美奈子



子ども同士のトラブルでの言葉がけ

子どもの遊びでは、子ども同士のトラブルもよく起こります。しかし、子ども同士のトラブルは、子どもが感謝、謝罪、危機意識を習得し、人間関係を学ぶ機会です。

以下、2つの事例で、保育者はどのように言葉がけをすればよいかを考察します。

① 他の子のおもちゃを取ろうとする子に

子どものおもちゃの取り合いは、とくに、自我が芽生え競争心をもち始める4歳以降に多く、子ども自身が納得して改善することが大切です。

保育者は「おもちゃが欲しい」という子どもの気持ちに共感しながら、「貸し借りの言葉」や「待つ姿勢」を習得できるように言葉がけをします。

<保育者の言葉がけの例>

- ・「このおもちゃで遊ぶと楽しそうだね」
- ・「今、〇〇ちゃんが使っているから『後で貸して!』ってお願いしてみようよ」
- ・「貸してくれたら、何て言うの? そう、『ありがとう』だね」

② 乱暴な言葉を使う子に

子どもは、日々の遊びのなかで、多くの言葉を習得します。よくない言葉もすぐに覚えますので、保育者は、子どもが正しい言葉遣いができるように、言葉がけをしていく必要があります。

子どもが、乱暴な言葉を使う背景や理由はさまざまです。「どうしてそんな言葉を使うの?」「本当は、何が言いたかったの?」と、子どもの考えを聞いて、子どもの気持ちを受け止めましょう。

子どもはうまく言葉で表現できない時に暴言を口走ることがあります。「こう言いましょ!」と正しい言葉を示すと、子どもは納得して言葉遣いを修正します。

<保育者の言葉がけの例>

- ・「『お前! 〇〇しろ!』と言われたら、どんな気持ちがする?」
- ・「悲しいよね、楽しく遊べないよね」

- ・「『〇〇くん、〇〇してくれる?』とお願いすればいいよ!」

周りと違った行動、態度をとる子どもへの言葉がけ

子どもには、みんなで楽しく遊びたがる子どもばかりではなく、ひとり遊びが好きな子ども、周りの子どもと違った行動や態度をとる子どももいます。

そうした子どもについてふたつの事例で、保育者の言葉がけについて考察します。

① 友達と遊ばずひとりで遊んでいる子に

保育者は、ひとりで遊んでいる子に、唐突に「みんなと一緒に遊ぼうよ!」と言葉がけするのではなく、まずは、ひとりで遊んでいる理由や気持ちを確認しましょう。

保育者は、ひとりで遊んでいる子どもに「何をしているの?」と言葉をかけます。子どもの反応が、ひとり遊びに楽しく没頭している場合は、そのまま見守ります。しかし、子どもの反応が、どこか寂しそうだったり、他の子どもたちを気にかけている場合には、「先生と一緒にみんなところに行きましょう」と、子どもが友達の輪に入れるように言葉をかけるとよいです。

② 片付けをしない子に

他の子どもは片付けている状況で、片付けない子どもがいる場合、保育者はどのように言葉がけするとよいでしょうか。

子どもが片付けをしない理由に合わせた言葉がけが必要です。

- (1)子どもが遊びに夢中で、片付けの指示が聞こえていない場合は、保育者は「お片付けの時間ですよ」と言葉をかけます。
- (2)まだ遊んでいたたいので片付けたくない場合は、保育者は「続きは、お昼を食べた後でやりましょう」と、遊びの続きができるよう配慮した言葉がけをして、片付けを促してください。

よりよい保育に向けた言葉がけ

第5回 「子どもへの言葉がけ④」 ～生活のなかで(1)～

日本保健医療大学 講師 木梨 美奈子



「生きる力の基礎」を培う保育現場

保育の現場である保育所、認定こども園では、「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の条文に、それぞれ「生きる力の基礎」との文言があります。

「生きる力」は、文部科学省によって、新学習指導要領に盛り込まれている文言であり「子どもたちが、激しく変化する今後の社会を生き抜いていく力」のことで、

文部科学省では、「生きる力」を①「知＝確かな学力」、②「徳＝豊かな人間性」、③「体＝健康・体力」、の3要素のバランスがとれた力であると定義しています。

国は、学校教育の前段階である保育現場を「生きる力の基礎」を培う場であると、位置付けています。

以上のことから、保育現場において、「生きる力の基礎」を培うための保育者の言葉がけは、国の方針であり、園生活で日常的に行われる必要があると考えます。

「生きる力の基礎」を培うための言葉がけ

「生きる力の基礎」を培うために、保育者は、どのように言葉がけをすればよいのでしょうか。

知・徳・体の「生きる力」の要素別に、例を挙げながら説明していきます。

①知＝確かな学力

「知＝確かな学力」では、学習指導要領に「主体的に学習し～」とあります。子どもが、日々の生活のなかで、「何だろう?」「面白いなあ」と関心をもつことから、確かな学力が育ちます。子どもが何かに夢中になっている時は、不用意な声かけはしないで、子どもの思いのままにさせてあげましょう。

やがて、「先生、これ、な～に?」「あとでって、いつ?」などと、子どもから質問攻めにされること

になります。「雷は、どうしてゴロゴロ音をするの?」などと、保育者が答えにくい質問もあります。

簡単な質問にはすぐに答えて、難易度の高い質問には「お空で鬼たちがゴロゴロ怒っているのかな、〇〇君は、どう思う?」と、子どもが不思議がる気持ちに寄り添う言葉がけをしましょう。忙しい時は「給食が終わってからね」など、誠意をもって声かけをしてください。

②徳＝豊かな人間性

「徳＝豊かな人間性」では、学習指導要領に「自らを律しつつ、他人と共に協調し～」とあります。まずは、自分のことは自分でできるようになり、さらに他者を思いやる心を養います。

他者とのコミュニケーションは、挨拶から始まります。しかしながら、挨拶を恥ずかしがったり、相手から挨拶が返ってこなかったらと心配して、自分から挨拶ができない子どもがいます。保育者は「おはようって言うと、楽しいよ」「先生と一緒におはようって言うてみよう」などと、自然に挨拶が身に付くよう、楽しい雰囲気の中で、明るく声かけするとよいです。

③「体＝健康・体力」

「体＝健康・体力」では、学習指導要領に「たくましく生きるため」とあります。知・徳の実践は、健康で体力があつてこそ可能となります。

保育の生活で、健康・体力を育むためには、食事、午睡などの生活リズムを習慣づけることが大切です。特に食に関しては、幼児期に正しい食習慣を身に付けることが、生涯にわたる「生きる力の基礎」づくりとなります。

食に関する保育者の声かけは、「もぐもぐおいしいね」「ぱくん、もう食べちゃった」と擬声語で声かけすると、よく食べてくれます。保育者が「ああ、おいしい!」と、実際に食べている姿を子どもに見せることも効果的です。保育者の声かけによって、子どもの食への興味を引き出します。

よりよい保育に向けた言葉がけ

第6回 「子どもへの言葉がけ⑤」 ～生活のなかで(2)～

日本保健医療大学 講師 木梨 美奈子



保育の役割における言葉がけ

保育者が子どもに日々、言葉がけするなかで、保育者は「保育の役割」を常に念頭におく必要があります。

では、「保育の役割」とは何か。公的に定義されている「保育の役割」は、「保育所保育指針」第1章総則に、次のように明文化されています。「保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。」つまり、保育所保育の役割は、①入所児童の保育、②保護者への子育て支援、③地域住民の子育て支援、の3種類となっています。

今回は、「子どもへの言葉がけ」がテーマですので、①入所児童の保育、のみを取り上げ、他2つについては、該当するテーマの回で取り上げます。

保育現場の役割を果たすための保育とは、「生きる力の基礎」を培う保育です。「生きる力の基礎」については、前回と重複しますので、この場では繰り返しません。しかし、「生きる力の基礎」を育むためには、子どもの「自己肯定感」を高める必要があります。

自分には生きる価値があると自らの存在を大切に思える子どもは、激しく変化する今後の社会を生き抜いていくことができます。自己肯定感、社会性や人間性の土台であり、子どもの成長には欠かすことのできない部分です。

つまり、「生きる力の基礎」を育むことは、同時に保育の役割を果たすこととなります。その保育方針として、子どもの「自己肯定感」を高める保育が必要となるのです。保育者の子どもへの言葉がけは、子どもの「自己肯定感」を高めるための言葉がけが求められます。

子どもの心情に配慮してほめる

自己肯定感の土台は、6歳までに作られると言われています。そのため、6歳までに多くの時間を子どもと一緒に過ごす保育者は大変重要な存在です。

子どもの自己肯定感を高めるためには、子どもをほめていくことが効果的です。ほめられると、認めてもらえたと感じますので、自分に自信をもつことができ、自己肯定感は高まります。子どもが何かを達成した時は、たとえ小さなことでもほめることが大切です。

具体的なほめ方ですが、ほめる時の子どもの心情に配慮しながら、適切にほめます。注意点を3点挙げておきましょう。

- (1) その場ですぐにほめる
- (2) 結果よりも努力の過程をほめる
- (3) 失敗した時も努力の過程をほめる

特に、(2)(3)の共通点である「努力の過程をほめる」は、「できたね!」「残念だったね!」と、保育者が結果を問題にすると、子どもは常に「よい結果を出さなければ」と、プレッシャーを感じて無理をしてしまいます。これでは、自己肯定感が高まるどころか、逆に下げてしまい、自信喪失を招くことになります。

「よく練習したね!」「がんばってよかったね!」「あともう少しでできるよ!」など、それまでの子どもの努力を認めるほめ言葉で言葉がけをしましょう。

一人の子どもが、自己肯定感をもてるかもてないかは、その子どもの生涯の生き方を左右します。どのような困難にも立ち向かっていける原動力、つまり「生きる力の基礎」を6歳までに培うには、幼児期にかかわる大人の声がかげにかかっています。

5回にわたって「子どもへの言葉がけ」をお送りしてまいりました。次回から、「保護者への言葉がけ」を読者の皆さまと一緒に考えてまいります。

新しい時代は子どもから

～子どもの今が未来を創る～

子どもの「遊び」を
守りましょう

子どもの思いを
受け止めましょう

子どもの
「自分でやりたい」を
大切にしましょう

子ども自身に
用いられる力を
育てましょう

みんなで食べると
美味しいんです

子ども同士の
関わりが大切です

子どもは自然が
大好きです

公社)全国私立保育連盟は、未来を生きていく子どもたちの為に
社会へ向けて、7つのメッセージを送ります。

あおむし通信

<https://www.zenshihoren.or.jp/>



新しい時代は子どもから

<https://undou.zenshihoren.or.jp/>



全私保連
公式 YouTube チャンネル
<https://www.youtube.com/channel/UCy3LvUSg5wnwIXdA0RkkJXA>



公益社団法人
全国私立保育連盟